

(英語版)

(アラビア語版)

ブログ「中東と石油」:https://blog.goo.ne.jp/maedatakayuki_1943

ブログ「OCIN in the Cloud」:<https://aehakazuya.blogspot.com/>

マイライブラリーNo.:0498

(注)本稿は 2020 年 3 月 11 日から 21 日まで 3 回に分けてブログ「中東と石油」及び「OCIN in the Cloud」に掲載したものです。

2020.3.22

サウジアラビアを危うくする二人の王子: 皇太子と石油相

まえがき

現在のサウジアラビアで華々しく活躍している王子と言えば、ムハンマド皇太子とアブドルアジズ石油相である。父親は共にサルマン国王だが、二人は母親の異なる異母兄弟である。1985 年生まれのムハンマド(ムハンマド・ビン・サルマンの頭文字をとり通称 MbS と呼ばれる)は 1960 年生まれのアブドルアジズより若い、国王の寵愛を受け実質的な最高権力者として同国に君臨している。

(サルマン国王家々系図:<http://menadabase.maeda1.jp/3-1-7.pdf> 参照)

二人は現在危険な賭けに手を染めている。ムハンマド皇太子の賭けは叔父と従兄弟の 3 人の王族を反逆罪で拘束し自らの強権体制をさらに強固にしようとしていることである。他方、アブドルアジズ石油相の賭けはこれまで維持してきたロシアとの協調減産体制を捨て、新型コロナウイルス問題で世界経済が悪化し石油消費の減退が明らかであるにもかかわらず、増産に転じ米国のシェールガス・オイル企業と市場シェアを競う不毛なチキンレースに飛び込んだことである。二人の賭けは極めて危険なものであり、万一舵取りを誤れば自らの地位が危ういばかりでなく、サウド家さらにはサウジアラビアそのものを窮地に追いやりかねない。

Part 1. ムハンマド皇太子の賭け



2 月 6 日、Wall Street Journal(WSJ)、New York Times 及び Bloomberg がサウド家王族の逮捕を相次いで報道した。3 紙の報道を総合すると、逮捕されたのはサルマン国王の実弟アハマド王子、実兄故ナイフ内相の息子(つまり国王の甥)ムハンマド王子及びナワーフ王子の 3 名である。ムハンマド皇太子から見れば叔父と従兄弟たちということになる。サルマン、アハマド及びナイフはハッサ・スデイリ妃を母親とするスデイリ・セブン(スデイリ 7 兄弟)として有名である。因みに長兄ファハドは先代代国王、次兄スルタンは先代アブダラー国王の時代に皇太子となり、また三番目のナイフもスルタン亡き後、皇太子になっている。7 人兄弟のうちすでに 5 人は故人で、存命はサルマン現国王と今回逮捕されたアハマド王子の二人だけである。

(家系図「[アブドルアジズ初代国王の王妃とその子息たち](#)」参照)

メディアは逮捕の理由は反逆罪(treason)、王子たちは自宅に軟禁されていると報じているが、続報はなく真相は闇の中である。しかし一連の逮捕劇の背後にムハンマド皇太子の強い意図が働いているとの見方では一致している。皇太子が現在サウジアラビアの事実上の支配者であることは衆目の一致するところであり、彼の強権的手法がサウジ国内に恐怖政治をもたらしていると言っても過言ではない。しかしイエメン内戦への介入とその泥沼化、あるいはワシントン・ポストのカシヨギ記者がイスタンブールのサウジ領事館で殺された事件(カシヨギ事件¹)、さらには汚職摘発に名を借りた王族・有力財界人の大量逮捕事件などにより、国内外で皇太子の評判は地に落ちている。そして皇太子が旗を振る Vision2030 は停滞し²、アラムコの海外での上場見通しも立たず、石油価格の下落により国家財政の危機が取りざたされるなど経済の難問が山積している(石油問題については次項で詳しく触れる)。

ムハンマド皇太子が身内の王族を逮捕するのは今回が初めてではない。2017 年の汚職摘発事件では世界的な大富豪として有名なアル・ワリード王子及びアブダッラー前国王の子息ミッターブ王子(当時国家警備隊相)が逮捕されている。アル・ワリード王子は保釈金 60 億ドルで釈放されたと伝えられ³、ミッターブ王子は国家警備隊相を解任された。王子二人を含む大物財界人はいずれも裁判前に釈放されており、政府と何らかの取引があったことは間違いない。アブダッラー前国王の親衛隊とも言える国家警備隊は国防相を兼務するムハンマド皇太子の正規軍に吸収され、軍事面においてもムハンマドは実権を掌握している。

今回逮捕された 3 人の王族の顔触れを見ると、アハマド王子は 2012 年まで実兄のナイフ内相(今回逮捕されたムハンマド及びナワーフ王子の父親)の下で副大臣を務めている。その後は政界の表面に出ることはなかったが、数年前に休暇でロンドン滞在中、西欧メディアに出演し自国のイエメン内戦介入を批判した。これがサルマン国王及びムハンマド皇太子の逆鱗に触れ帰国が危うくなった。釈明により帰国は許されたが、その後は逼塞している。故ナイフの息子ムハンマドは 2015 年から 2017 年までサルマン国王の下で皇太子を務めたが 2017 年 6 月に皇太子を解任され、サルマン国王の息子ムハンマドと交替させられている。

2017 年と今回の王族逮捕には一つの大きく異なる点がある。サウド王家の家系図(上記)を見てもわかる通り、2017 年の逮捕劇は異母兄弟(タラール王子及びアブダッラー前国王)の子息が対象であった。即ちムハンマド皇太子にとって祖母の異なる従兄弟たちである。これに対して今回は祖母ハッサ・ステイリを同じくする叔父と従兄弟たちである。ムハンマド皇太子に自分(及び父親のサルマン国王)の地位を脅かすサウド家王族は血の濃淡に関係なく断罪するという冷酷な意思が感じられる。政敵排除に聖域なし、とする恐怖政治が深まったと見るべきであろう。

Part 2. アブドルアジズ石油相の賭け



3月5日、オーストリアのウィーンで OPEC 臨時総会が開催された。前年 12 月の総会及びそれに続くロシアなど非 OPEC 産油国、いわゆる OPEC+(プラス)との会合で、それまでの日量 120 万バレル(B/D)の減産量を今年 3 月までさらに 50 万 B/D 上乗せし 170 万 B/D とすることが決定されている。因みにサウジアラビアは 40 万 B/D を自主減産すると表明、合計で世界の原油生産量の 2%に相当する 210 万 B/D が市場から消え、OPEC+

は石油価格のさらなる上昇を目論んだのである⁴。

ところが米国のシェールオイル企業は OPEC+の減産効果を帳消しする増産姿勢を強め(「[米国の石油生産量の推移\(2017 年～2019 年 12 月\)](#)」参照)、世界の石油市況は供給過剰の状況を脱しなかった。そこに降って湧いたのが新型コロナウイルス問題である。中国は湖北省全域を封鎖したが、その後も全世界に蔓延し世界の経済がマヒしている。供給過剰と需要減退が重なり原油価格は急落した。

このためサウジアラビアは OPEC+による減産強化が避けられないと判断、従来の 210 万 B/D に加え、さらに 150 万 B/D の追加減産を提案した。OPEC 加盟国が 100 万 B/D、ロシアなど非 OPEC 国が 50 万 B/D を分担するという案である。5 日の OPEC 総会ではサウジアラビアの提案通り 6 月末まで 150 万 B/D の追加減産を実施することを公式発表した⁵。奇妙なことには同じ日に減産を年末までとする第二のプレスリリースが発表されたのである⁶。OPEC 総会後にプレスリリースが二度も発表されるのはかつてないことであり OPEC 事務局の混乱の様相がうかがえる。一連の決定には OPEC の盟主サウジアラビアの事実上の権力者ムハンマド皇太子の意思が反映されていることは間違いなく、アブドゥルアジズ石油相が皇太子に振り回され、他の OPEC 諸国がサウジアラビアに振り回されたと推測される。

OPEC が発表した減産量はロシアなど非 OPEC も対象としており、したがって総会翌日ロシアを含めた OPEC+会合で最終決定されるべきものである。しかしこれまでの 210 万 B/D 減産の結果、米国がシェールオイルを増産、結局米国が漁夫の利を得ていることをロシアは苦々しく思っていた。従って 150 万 B/D の追加減産には当初から反対であった。

サウジアラビアが OPEC+の事前会合で追加減産のプランを持ち出したとき、ロシアのノバク石油相はプーチン大統領と打ち合わせる必要があるとしてモスクワに一時帰国した。一方、サウジアラビアはノバク石油相の最終確認を得ないまま 5 日の OPEC 総会で今年末までの OPEC+の追加減産を一方的に決定し、公表したのである。ノバク石油相がウィーンに戻ったのは 6 日の OPEC+会合当日の朝であった。因みに 1 か月前サルマン国王とプーチン大統領は電話会談で石油市場の安定が必要であると確認している⁷。アブドゥルアジズ石油相は OPEC+の会合でロシアがサウジ案を受け入れるものと思込み、プーチン大統領の本心を読めなかったようである。いずれにしても彼の強引な総会運営と見通しの甘さが OPEC+協調減産決裂の原因であろう。

OPEC+体制の崩壊に加え、先の見通せない新型コロナウイルス問題が重なり原油価格は 30 ドル台まで暴落した。中国をはじめ世界の景気回復の兆しが見えない中では原油価格も当分回復の見込みがな

さそうである。そのような中でサウジアラビアは顧客向け価格の引き下げ⁹並びにアラムコの生産能力を1,300万B/Dに引き上げる方針⁹を打ち出した。サウジアラビアは価格維持のためのスウィング・プロデューサーの役割を捨て、無謀ともいえる180度の政策転換に乗り出した。これらはすべてムハンマド皇太子の意向であろう。今回の一連の動きを見る限りアブドルアジズ石油相は皇太子の意のままに動く単なる操り人形にしか映らない。

ともあれサウジアラビアの石油政策は低価格と大量放出で米国のシェール業者を市場から退場させる方針であることがはっきりした。しかしこれによってサウジアラビアが受ける傷も浅くない。これは米国とサウジアラビア双方にとって体力を賭けたチキンレースである。過酷なレースの中でアブドルアジズ王子は右往左往するばかりである。

(参考レポート)「[指導力が問われるサウジ新石油相アブドルアジズ王子](#)」(2019年10月)

あとがき



サウド家に統治の正統性を認める専制君主制国家サウジアラビアでムハンマド皇太子は絶対的支配者の地位を賭け、歯向かう王族を容赦なく叩き潰そうとしている。イエメン内戦の泥沼化とカショギ事件により皇太子の海外での評判は地に堕ちている。同族の王子たちを血祭りにあげるの国内に悪評が広がるのを抑えるとともに、強い為政者のイメージを確立したいためと言えよう。そこにあるのは唯我独尊と傲慢

であるが、これまでのところ皇太子の賭けの勝敗は五分五分である。

一方、アブドルアジズ石油相の原油の大幅増産及び値引き販売と言う賭けは、新型コロナウイルス問題を契機とする世界的不況が目前に迫り極めて不利な状況にある。賭けが裏目に出る可能性は小さくない。ただサウジアラビアの石油政策はムハンマド皇太子が決定しており、アブドルアジズは操り人形に過ぎないのも事実である。従って石油政策が失敗した場合のつけはムハンマドに戻ってくるが、賭けの一義的な責任者はあくまで石油相である。

結果が凶と出た場合、アブドルアジズが詰め腹を切られることになる。サウド家のしかも現国王の息子が責任を取らされるなどということはこれまで考えられなかったことである。逆に言えばこれまで石油相にヤマニ大臣やナイミ大臣のようなテクノクラートが起用されたのは、石油政策が失敗したときに石油相に責任を負わせ、国王以下サウド家のトップに累が及ばないようにするためであった。

しかしムハンマド皇太子の冷酷非情なやり方はアブドルアジズ石油相に対しても例外ではなからう。汚職容疑で血のつながりの薄いアルワリード王子等を、また反逆罪でステイリ・セブンのアハマド王子等を拘束した皇太子なら異母兄弟のアブドルアジズに詰め腹を切らせることをためらわないであろう。ためらいがあるとすれば、父親のサルマン国王に対する遠慮だけであろう。従ってサルマン国王存命中は手

荒なことはしないであろうが、父親が亡くなり、彼自身が国王になれば、義兄のアブドルアジズが安泰かどうかはわからない(もちろん MbS が順当に国王に即位できるか否かは別問題だが)。二人が異母兄弟であることがむしろ過激な方向に作用する可能性もあると言えよう。

現在の MbS は孤立無援で疑心暗鬼に陥っていると考えられ、相次ぐサウド家王族の拘束がそれを物語っている。彼が国王に即位したとき、サウジアラビアに肅清の嵐が吹き、アブドルアジズが第二の金正男(正恩の異母兄)にならないとも限らない。MbS は対外的には(特に米国のトランプ大統領に対しては)ひたすら羊の皮をかぶった狼を演じ続け、国内では権力集中と恐怖政治を推し進めるつもりであろうか。しかしトランプ大統領に恭順することは米国のシェール石油・ガスつぶしを狙うサウジアラビアの低価格、大增産という石油政策と矛盾することを意味する。そして国内で恐怖政治を強めた場合、経済の停滞は避けられない。これは穏健派王族のみならず国民一般を敵に回すことになり、イスラム過激派が付け入り絶対王政国家「サウジアラビア」(サウド家のアラビア)を危うくすることになるのではなかろうか。

(参考レポート)「[サウジアラビアが国名変更する日](#)」(2019 年 5 月)

以上

本件に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

荒葉一也

Arehakazuya1@gmail.com

1 レポート「どうなる？カシヨギ記者殺害事件の幕引き」(2019 年 4 月 22 日付)参照。

<http://mylibrary.maeda1.jp/0464KhashoggiCase.pdf>

2 レポート「サウジ・ビジョン 2030 に赤信号：皇太子を警戒する内外の民間経営者たち」(2019 年 1 月 9 日付)参照。

<http://mylibrary.maeda1.jp/0458MbsAndPrivateSectors.pdf>

3 レポート「混迷深まるサウジアラビア(その1)：スケープゴートにされた大富豪アルワリード王子」(2018 年 1 月 12 日付)参照。

<http://mylibrary.maeda1.jp/0431Ksa2018-1Alwaleed.pdf>

4 レポート「OPEC+(プラス)の減産強化は持続可能な路線か？」2019 年 12 月 14 日付参照。

<http://mylibrary.maeda1.jp/0488OpecDec2019.pdf>

5 OPEC 178th (Extraordinary) Meeting of the Conference concludes

2020/3/5 OPEC Press Release

https://www.opec.org/opec_web/en/press_room/5865.htm

6 OPEC Heads of Delegation hold further consultations

2020/3/5 OPEC Press Release

https://www.opec.org/opec_web/en/press_room/5866.htm

7 Saudi Arabia's King Salman and Russia's Putin agree to ensure oil market stability: Kremlin

2020/2/3 Arab News

<https://www.arabnews.com/node/1622371/saudi-arabia>

⁸ Saudi Arabia slashes oil prices after collapse of OPEC+

2020/3/9 Arab News

<https://www.arabnews.com/node/1638781/business-economy>

⁹ Saudi Arabia ramps up oil production to record level

2020/3/11 Arab News

<https://www.arabnews.com/node/1640036/business-economy>